

第七回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

堀田 善衛 著『ミシェル城館の人』全三巻

(Ⅰ争乱の時代 1991年1月10日 Ⅱ自然 理性 運命 1992年4月25日
Ⅲ精神の祝祭 1994年1月10日 集英社 刊)

堀田 善衛 ほった よしえ 大正7年(1918)生まれ。平成10年(1998)没。富山県出身。

作家。慶応義塾大学文学部卒業。著書は、『広場の孤独』、『歴史』、『時間』、『インドで考えたこと』、『海鳴りの底から』、『若き日の詩人たちの肖像』、『橋上幻像』、『方丈記私記』、『ゴヤ』、『スペイン断章』、『定家名月記私抄』、他に『堀田善衛全集』全十六巻がある。

山内 昶 著『「食」の歴史人類学—比較文化論の地平—』

(1994年5月20日 人文書院 刊)

山内 昶 やまうち ひさし 昭和4年(1929)生まれ。東京都出身。

専攻は、人類学、比較文化学。京都大学文学部仏語仏文科卒業、同大学大学院(旧制)卒業。パリ大学高等研究院に留学。甲南大学教授(受賞時)。現在、甲南大学名誉教授。著書は、『経済人類学の対位法』、『経済人類学への招待』、『ロマンの誕生』、『現代フランスの文学と思想』、ほか訳書も多数ある。

受賞のことば

尊敬する作家、堀田善衛先生と御一緒におこがましくも賞をいただきましたことを大変光栄に思っております。故和辻先生には昔何度かお目にかかったことがあり、これも何かの御縁かも知れません。これを励みに今後もできるだけ幅広く、面白い本を書いてゆきたいと思っています。

《選考委員評》

二つの大きな収穫

司馬 遼太郎

モンテーニュというスランズ十六世紀の思想家にしてモラリストの人生と思想を、いきいきとした文学者の文章をもって書かれたのが、堀田善衛氏の『ミシェル城館の人』全三巻である。

本書は文学的であるとともに専門的でもある。幸い、その道の人でもある梅原委員のつよい推挽をえて、快かった。

堀田さんには、文化の多様な価値に対する鋭敏な感覚があり、累代の集積のようなものさえ感じさせる。

江戸時代史でいう北前船は、商品という名の文化の選別と伝播を果たしてきた。堀田さんが、越中第一の湊といわれた伏木湊のふるい廻船問屋にうまれたことと、その感受性の成立とは無縁ではないと私は感じてきた。

モンテーニュは、商業市民が、いわば貴族の株を買った家系にうまれた。その事情は、『ミシェル城館の人』にくわしい。その曾祖父が、廻船問屋によって巨富をなしたのが、やがて領地や城館を買うというエネルギーのはじまりになったという。このくだりを読んで、私は堀田さんと思ひ重ね、ひそかに楽しかった。

モンテーニュは、城館に住み、市長でもあった。思索者であることと、俗事の執行者であることとのさまざまなきらめきが、『ミシェル城館の人』のなかであふれている。

山内昶氏の『「食」の歴史人類学』も、おもしろかった。

食べること、食べもの、というこれ以上具体的なものはないという対象を、旺盛なものを

考える能力でもって咀嚼し、比較文化史として私どもの前に、コースとして出してくれた。智恵とやさしさと、さらには愛をさえ感じさせる良書である。

『ミシェル城館の人』

陳 舜臣

モンテーニュは、時代からいえば、関ヶ原の合戦以前の人である。それにもかかわらず、彼が近代知識人の祖といわれるのは、彼の観察がすでに時代をこえていたからであろう。近代というのも、ほかに言いようがないからである。

堀田さんが、モンテーニュの精神の内面にまで立ち入ったのは「エッセー」がほかにはもめられないからであろう。

時代も思想も、「エッセー」から放出される。自然も理性も運命もおなじである。

秩序あり、しかも奇蹟も異常もない生活。哲人のめざした道を、私もトボトボと歩みたい。ふと最後の章を書き終えた堀田さんの心を、のぞいてみたいと思う。

『「食」の歴史人類学』

九三年、台湾で食についてシンポジウムがあり、一年おきなので、つぎは九五年になる。そろそろその準備もあるので、山内さんの本を読んでいた。

文化は何を通じても考えられるが、一番身に近い食を通じてなら、人それぞれのアングルがあって興味があろうと思ったのだ。ところが興味あるどころではなかった。異国料理との出会いが、我々の知りたいポイントを中心に、具体的に述べられ、さらに雑食動物ホモ・サピエンスの考察に進む。

食物タブーについては色々と論じられたが、本書は一步踏みこんだ考察があり、示唆に富むだけでなく、そこに知的な興奮の渦にしばし酔うことができる。

身近でありながら、考えようによっては、きわめて遠いテーマがそこに扱われている。この遠近とりまぜた、微妙な織り方が本書の魅力であろう。

梅原 猛

今回の候補作の中に堀田善衛氏の『ミシェル城館の人』が含まれていたことはまことに幸運であった。私は最近の日本の出版物をそうたくさんは読んでいないが、この著書は近頃の快著であると思った。

堀田善衛氏はちょうどルネ・デカルトの「ヨクカクレモノハヨクイキル」という知恵の如く、ヨーロッパで隠れた生活を送り、このようなすぐれた著書を書き上げたのであろう。モンテーニュの著書には直接自筆原稿にあたって目を通し、彼について書かれたものはほとんど読んで、モンテーニュの人生について書いたと思われるが、作者の筆遣いは術学的な学者のそれではなく高等な講談を語る作家のそれである。

この堀田氏の筆によって、パリの王宮では、全く愚かな宗教的争いのためにも人間の血が多く流れ、ペストが蔓延したこの時代に、懐疑という渡世の武器を十二分に駆使してたたかに生きたモンテーニュの相貌がみごとにとらえられている。おそらく日本人にして、それほどまでに鮮やかな西欧の思想家の風貌をとらえた著書は少なからう。私もこの著書を読んで、わが身の回りの雑音から遠ざかり、堀田氏の如く外国で「よく隠れてよく生きる」生活をしたいと思った次第である。この作品が和辻哲郎文化賞を受賞されたことによって、和辻哲郎文化賞の価値をいっそう高めることになったと思う。

山内昶氏の『「食」の歴史人類学』もまことにおもしろかった。著者はフランス文学を専攻した学者であるが、いつこのような食文化のことに関心をもったのであろう。日本及びヨーロッパの文献をよく調べ、しかも舌鼓を打ってこの著書を書いているようなところがあり、文章は軽快で生き生きとしていた。このような著書が文化人類学者ではなく、フランス文学者によって書かれたところが妙というべきであろう。あるいは著者は天性の美食家かもしれない。